

論文番号	2 (第 11 回研究会 2013.11.23 於 恵泉女学園大学)
タイトル	発話の偶発的側面を起点とする相互行為的トピック推移
著者名(所属)	犬飼 亜紀 (北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院)
連絡先 Eメール	inugaiaki0213@gmail.com
<p>日常会話の中で重要な位置を占めるもののひとつに情報交換のシステムがある。特に会話のトピックが幾つかの話者交替に渡ってどのように推移していくのかは興味深い。Brown and Yule (1983)によれば、日常会話におけるトピックは前もって明示されているものではなく、会話当事者の間で、会話進行中に、提示したり、採用したり、拒否したりするという交渉の後に確立される一つの枠組であるとされる。この知見に依拠した串田 (1997) では、そのようなトピックは、会話者たちが相互行為的、協働的に生み出すものであると捉えている。また同論文によれば、トピック推移は先行発話の任意の要素とクラス形成を為す相互行為的な「共一選択」により構築される。本研究では、以上のようなクラス形成／共一選択を基調とするトピック推移の一事例を分析し、特に発話の偶発的側面が、トピック推移を引き起こす「任意の要素」の一つとなりうることを示す。</p> <p>本研究では、日本人女性 3 名の会話をビデオカメラで撮影し、その内容を会話分析的手法によって観察・分析した。撮影時間は約 60 分で、その活動内容は特別な制限や課題が与えられておらず、飲食などを伴って行われるいわゆる「雑談」である。本発表では、「言い間違い」という会話活動中に予期せず起こった偶発的現象を起点に生じたトピック推移を含む数分間の場面を分析の対象とした。</p> <p>分析の結果、相互行為的なトピック推移に関して次の 2 点を明らかにした。第一に、偶発的に起こった「言い間違い」は、次に「修正する」という行為を誘発している。これは、発話の言語的意味ではなく、行為的部分に聞き手が反応している点で、串田 (1997) が挙げる「接線的な共一選択」の新たな事例と言える。「接線的な共一選択」とは、言明の付随的側面に対して応答することによって、それまでの言語活動のシークエンスとは別の言語活動を開始するものとされている。第二に、この「言い間違いー修正」という一連の相互行為によって、先行するシークエンスにはない構図が発現し、その構図が後続する会話の内容に影響を与えている。この構図は、Goffman(1981)による「participation framework (参与の枠組み)」、すなわち、会話の場に参与している全ての成員の発話を巡る関係を「社会的場面」や「社会的遭遇」の観点から捉えた、いわば「参与の構図」(串田 1997) の一種であると考えられる。話し手と聞き手という立場の構図に加え、偶発的に言い間違いを起こした話し手に対し、聞き手は「修正する」という新たな役割に気づき、それを達成することで、先行シークエンスとは異なる役割と立場をもった話し手と聞き手として存在することになる。さらに、当該の相互行為に後続する会話の内容がこの参与の構図を踏まえ「自身が言い間違いをした」エピソードとなっていることから、本分析においては、参与者が偶発的な現象を起点に、相互行為的に作り出した新たな参与の構図が、トピック推移を支える不可欠な要素となっていることが確認された。</p> <p>「言い間違いー修正」という相互行為は、参与者の意図とは無関係に起こった偶発的要素に対する反応という点において、串田 (1997) が挙げる「接線的な共一選択」の新たな事例といえる。また、この一連の相互行為は、先行するシークエンスにはない立場と役割を話し手と聞き手にもたらただけでなく、後続する会話の内容にも影響を与えていた。したがって、発話中に予期せず起こった偶発的な「言い間違い」は、新たな参与の構図を創出する相互行為の起点となり、またその参与の構図は、トピック推移の新たな展開の可能性を提示する要素として捉え直すことができる。</p>	
<p>参考文献</p> <p>串田秀也 (1997) 「会話のトピックはいかに作られていくか」 谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社：pp. 173-212.</p> <p>Brown, G. & Yule, G. (1983). <i>Discourse analysis</i>. Cambridge University Press.</p> <p>Goffman, E.(1981). <i>Forms of Talk</i>. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.</p>	